

豊能地区

日時 8月23日(火) 14:00~16:00
会場 豊中市立南丘小学校多目的室
内容 墨アート講座
講師 武永 真先生・山本敏子先生(NPO法人墨アートプロジェクト)
参加者 40名

〈準備物〉墨アート用画仙紙半紙(一人10枚)、墨液、白抜き材(わんぱう)、雑巾、アイロン4台、小皿40、段ボール刷毛40、刷毛40など
参加者各自で書道セット(筆大小・硯・下敷き)と絵の具用筆洗バケツ、雑巾、新聞紙2日分

図画工作5・6年下の教科書(開隆堂)では、「墨から生まれる世界」という題材名で、墨と紙の特徴を生かして工夫して表現する学習が掲載されている。この学習の特で大切なめあてとされているのは、「墨で描くことを楽しもう」である。高学年の題材であるが、どんな学年の子どもも楽しむことのできる内容である。

にじみ止めを施していない画仙紙に墨液で描く時、それまで図工で経験している、画用紙に水彩絵の具で描く時とは異なる効果が発見できる。思いがけない墨の色の広がりによって驚いて繰り返し試したり、表れた効果を何かに見立てて絵を描いたりすることに、大人も子どもも夢中になる。

豊能地区の実技研修会では、「墨アートプロジェクト」から武永真先生と山本敏子先生を講師に招聘し、墨アートの魅力について教えていただいた。希望者が募集開始後すぐに定員いっぱいになり、中学校からも参加者があり、大変盛況であった。

墨汁は、百円均一ショップのダイソーでも取り扱いがある、「墨液」という製品が、墨アートには適していると紹介されたので準備した。参加者が持参した別の墨汁を使ったら、墨の色が水色やオレンジ色などに分離してにじんだ。うっかり衣類についたときに、洗濯すれば落ちるタイプのものは向かないようだった。

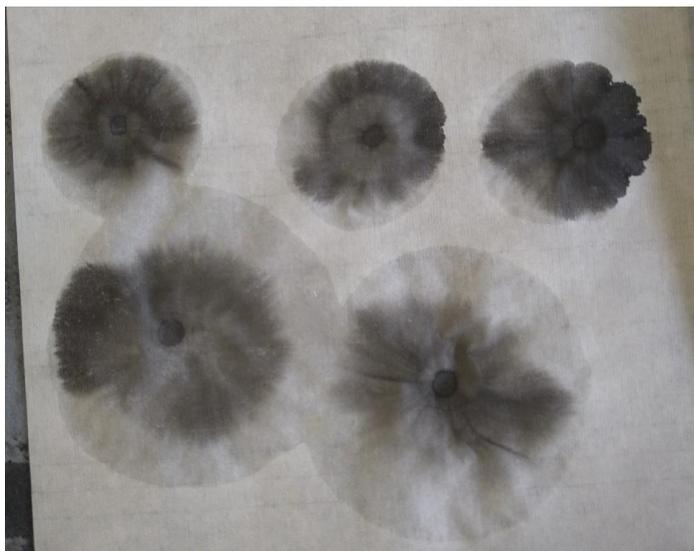
〈傘模様〉

墨で5mm程度の丸を描き、その中心に澄んだ水を何度か繰り返ししみ込ませる。すると油の成分を含んだ墨の粒子が水から逃げようとするため、丸の周囲に傘を広げたような模様が広がる。

今回用意した画仙紙は、墨アートに適したもので、児童が習字の授業の時に使う半紙は、にじみ止めの処理がしてあるので美しいにじみの効果が表れないということも紹介された。

〈レース模様〉

墨で一本線を描き、その線の下に水で線を引く。しばらく待っていると墨の線が水から逃れ、揺らいで広がってレース模様を描く。最初に引く線を波線にしても美しい模様になる。濡らした部分とは反対側に墨が広がるのが意外で驚きの声が上がった。



色々な筆使いも紹介された。

〈三墨法〉

薄墨を作り筆全体に含ませ、先端に少しだけ濃墨をつけ、漢字の「一」のような一本線を描くと、一筆グラデーションができる。このテクニックではなびらを描き重ねて思い思いに花を描いてみた。

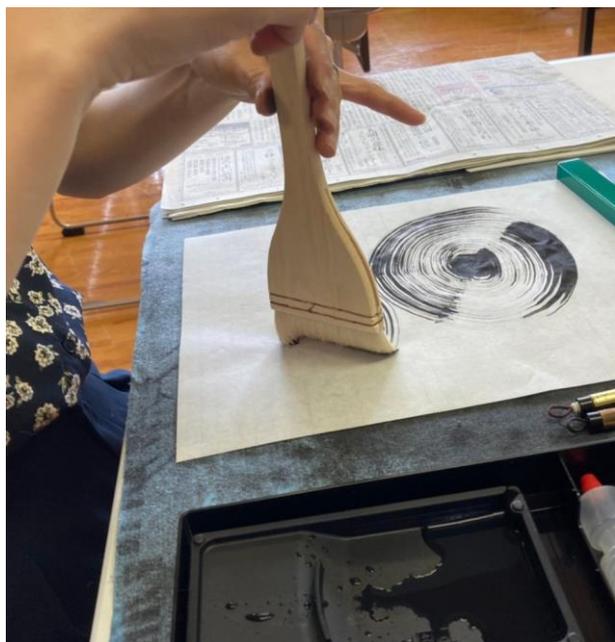
〈割筆〉

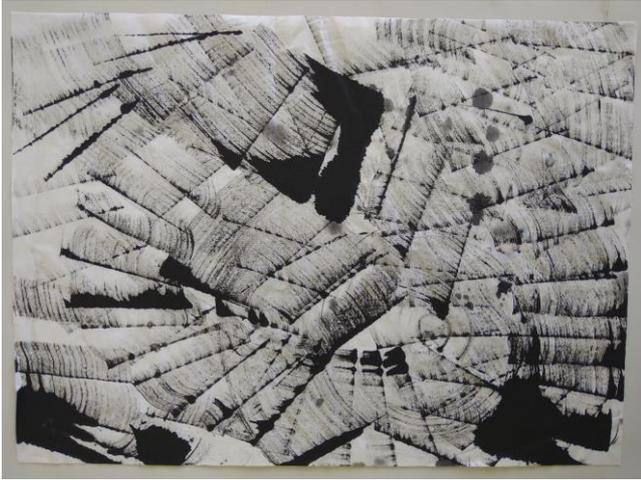
指で筆の穂先を押してバラバラに押し広げ、描いてみる。

〈刷毛〉

墨アートプロジェクトの方で、刷毛を用意して下さった。毛先に墨をつけ、ぐるりと円を描いてみた。刷毛は毛の幅が広いので、1ストロークで広い範囲を塗ることができる。かすれにも味わいがあり、筆だけでは描けない表現ができる。

しかし、刷毛は各校でクラスの人数分揃えるのは予算面からも容易ではない。そこで段ボール紙を刷毛のような広い幅に切り揃えて使ってみる方法も紹介された。





〈わんぱう白抜き法〉

わんぱうとは、墨運堂から発売している白抜き剤で、さきにこれを溶いた液で字や模様を描き、アイロンなどを使って乾かしたあと、裏から刷毛などで薄墨や墨を刷くと、白く鮮やかに抜け残るものである。わんぱうの液で最初に教えてもらった傘模様を試したりして不思議な効果を楽しんだ。



以上のようなテクニックを体験したのち、そこからしばらくは参加者がそれぞれ自由に制作する時間をとった。

描いていると思いがけないにじみやかすれの表情が生まれ、それを何か具体物に見立てて絵画にする体験も楽しい。筆への墨の含ませ方や、筆先を紙に触れさせる加減を工夫して、配られた半紙を何枚も使って試した。さらに時間の経過とともに墨の表情が変化する様子が興味深くてついつい集中してしまい、まだまだ時間が続けばよいのにと考えた。会場ではた

くさんの美しい作品が生まれ、参加者同士見せあって交流するのも楽しかった。

授業で子どもたちが黒と白で表現できる世界の広さや深さを知り、味わってくれるのが楽しみである。

